

演習 保育内容

人間関係

— 基礎的事項の理解と指導法 —

田代和美
榎本眞実 編著

梅田優子
小倉定枝
片川智子
金澤妙子
金 瑛珠
高橋優子
高橋陽子
矢萩恭子
吉岡晶子 共著



建帛社
KENPAKUSHA

はじめに

この教科書は、幼稚園教育要領・保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領における人との関わりに関する領域「人間関係」、すなわち子どもたちが「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」ための援助について、あなたが子どもたちの姿に寄り添って考えられるようになってほしいと願い編集した。

領域「人間関係」は教科とは違い、日々の生活を子どもたちと共に積み重ねていく中で、子どもたちが自分の力で行動することの充実感を味わい、身近な人と親しみ、支え合って生活できるように援助していくものがあり、自分を棚に上げて子どもたちに教えるものではない。どのような援助をすることが子どもにとって最もよいのかを授業内で、また保育の場で考えていくことを通して、あなた自身もこれから子どもたちと共に同じ方向で育っていくことが必要なのである。

人と関わる力というのは、目に見えたり測れたりするものではない。そして1から2，2から3へすんなりと発達するものでもない。乳幼児期という人生の根を培う数年間に、子どもたちの人間関係がどのように広がり、また深まっていくのか。その過程が理解できて初めて、その過程を歩む子どもたちのそれぞれの今の姿を大切に思うことができる。本書は、領域に関する専門的事項「幼児と人間関係」にも対応できるように作られているので、その点を学んでほしい。

授業の中では子どもは目の前におらず、子どもの応答がないので、実際の援助について考えるのは容易ではない。それを補うために本書には多くの事例を掲載している。事例を通して、生活する子どもたちの姿をできるだけイメージしながらそれぞれが考えたり、グループで話し合ったりしてほしいからである。そしてその話し合いでは、誰の考えが正しいかを決めるのではないことを心に留めておいてほしい。子どもにとって最もよいと考える援助は、人によって違う場合もある。様々な感じ方や考え方がある

ことを知り，自分の感じ方や考え方は，その中の1つであるという経験を積み重ねていってほしい。自分にはなかった感じ方や考え方を批判するのではなく，分かろうとすること。その姿勢は，子どもたちの姿を捉える時に自分の見方や考え方を固定することなく，分かりたいと願いながら，子どもたちのことを考え続ける姿勢に繋がっている。

未来のあなたと共にある子どもたちが，他の人々と親しみ，支え合って生活していることを，そして未来のあなたが子どもたちと親しみ，支え合って生活していることを希う。

2019年3月

編者を代表して 田代 和美

A. モデルカリキュラム「保育内容「人間関係」の指導法」における到達目標と本書の対応項目

(1) 領域「人間関係」のねらい及び内容	
〈一般目標〉	
幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「人間関係」のねらい及び内容を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、領域「人間関係」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。	第3章
2) 領域「人間関係」のねらい及び内容を踏まえ、自立心を育て、人と関わる力を養うために必要な、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。	第5～13章
3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。	第3・15章
4) 幼児期の集団生活を通して様々な人と関わる経験と、小学校以降の生活や教科等とのつながりについて理解している。	第9・14・15章
(2) 領域「人間関係」の指導方法及び保育の構想	
〈一般目標〉	
幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「人間関係」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児の心情、認識、思考及び動き等を踏まえた教材研究や環境の重要性を理解し、保育構想に活用することができる。	第3・15章
2) 領域「人間関係」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した教材の効果的な活用法を理解し、保育構想に活用することができる。また、情報機器について、幼児の体験との関連を考慮しながら活用するなど留意点を理解している。	第15章
3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。	第15章
4) 模擬保育やロールプレイとその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。	第15章
5) 領域「人間関係」の特性に応じた現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。	第1・11・14・15章

B. モデルカリキュラム「幼児と人間関係」における到達目標と本書の対応項目

(1) 領域「環境」のねらい及び内容	
〈一般目標〉	
幼児を取り巻く人間関係をめぐる現代的課題を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児を取り巻く人間関係の現代的特徴とその社会的背景を理解している。	第1章
2) 人と関わる力の育ちがその後続く一人一人の人生を支える力となることを理解している。	第2章
(2) 幼児期の発達と領域「人間関係」	
〈一般目標〉	
幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論的視点から理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 乳児期に育つ人と関わる力の発達について、身近な大人との関係から説明できる。	第4～6章
2) 幼児期の遊びや生活の中で育つ人と関わる力の発達について、教師との関係、幼児との関係、集団の中での育ちを観点として説明できる。	第7～10章
3) 自立心の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。	第7～10章
4) 協同性の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。	第7～10章
5) 道徳性・規範意識の芽生えについて、発達の姿と合わせて説明できる。	第7～10章
6) 家族や地域との関わりと育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。	第11・14章

目次

第1章	現代の乳幼児を取り巻く人間関係	1
1.	親子・きょうだい、地域における 子ども同士の関係の変化	1
	(1) 家族における人間関係の変化	1
	(2) 地域における子ども同士の関わり	4
2.	現代の乳幼児を取り巻く人間関係の特徴と課題	7
	(1) 価値観の多様化	7
	(2) 外国にルーツを持つ子どもの増加	8
	(3) 子どもの貧困	9
	(4) 子どもへの虐待	10
	(5) 情報化社会における子どもたちの関係性の変化	11
第2章	私たちにとっての人間関係とは	17
1.	自分もほかの人も大切にすること： 人間関係の根本として	17
2.	私たちにとっての人間関係	19
3.	自分の感情や価値観が子どもとの関係に及ぼす影響	20
4.	子どもたちの人間関係を育む保育者への一歩	22
5.	おわりに	23
第3章	領域「人間関係」のねらいと内容及び評価	25
1.	幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定 こども園教育・保育要領の改訂（改定）と背景	25
2.	これからの時代に求められる力	27
3.	乳幼児期に育みたい認知能力と非認知能力	28
4.	資質・能力と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	29
	(1) 資質・能力とは	29
	(2) 育むことを目指す資質・能力	30
	(3) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	31
5.	保育のねらいと内容	36
	(1) 乳児保育	36

(2) 1歳以上3歳未満児の保育	40
(3) 3歳以上の領域「人間関係」のねらいと内容	42
6. 人間関係の育ちの理解と評価	45
(1) 評価の方法	45
(2) 子どもの理解を評価につなげる	45

第4章 0歳児の人との関わりと保育 49

1. 胎内～出生：人との出会い・“出会う・会う”	49
2. 出生～3か月未満： 特定の相手とのコミュニケーション	51
3. 3か月～おおむね6か月未満： 応答的に関わってくれる他者との情緒的な絆	52
4. おおむね6か月～： 見て真似る・自分なりに関わってみる	53

第5章 1歳児の人間関係の育ちを支える 57

1. 広がっていく世界： 特定の大人との信頼関係を基盤とした探索活動	58
2. 自己主張	60
3. 自分のモノ・友達のモノ	61
4. 友達がいて広がる楽しさ	63

第6章 2歳児の人との関わりと保育 65

1. 2歳児とは	65
2. 人と関わる力の育ちと保育： 大人との関わりを中心に	66
(1) “自分でできる！”：自己の育ちと大人との関係	66
(2) 大人に見守られながら気持ちを立て直す	67
3. 人と関わる力の育ちと保育： 子ども同士の関わりを中心に	68
(1) 友達と関わることの楽しさ	68
(2) 気持ちのぶつかり合い	69
4. 人と関わる力の育ちと保育： 一人の世界を感じる姿を中心に	71

5. 2歳児の育ちと保育のねらい・内容	72
第7章 3歳児の人間関係の育ちを支える	73
1. 3歳児の生活	73
2. 気持ちの安定・気持ちをひらく ～保育者をよりどころに～	74
3. 同じ場で遊ぶ楽しさ～仲間と出会う・触れ合う～	77
4. 一緒に遊ぶ楽しさと喜び ～友達と関わり合いながら遊び進める～	80
第8章 4歳児の人間関係の育ちを支える	82
1. 4歳児の揺れる心と行動	82
(1) 甘えたい、でも4歳の自分でありたい	82
(2) 自分なりの理想やイメージが 実現できない困難にぶつかる	83
(3) 友達と関わりたいのにうまくいかない	84
(4) 相手の行動の裏側にある気持ちに気が始める	85
2. 多様で複雑な関わり合いから生まれる力	86
(1) 保育者がいなくても集団の遊びが継続する	86
(2) クラスの集団づくりにつながる活動が発展する	87
3. 4歳児クラスの保育者の役割	88
(1) 心の支え手としての保育者	88
(2) 立ちはだかる壁としての保育者	89
(3) 委ねて信じて待つ保育者	89
第9章 5歳児の人間関係の育ちを支える	91
1. 遊びを通して、幼児の育ちや関わりの変化を捉える	92
2. 生活を通して、幼児の育ちや関わりの変化を捉える	93
3. 葛藤を乗り越える体験を通して、 幼児の育ちや関わりの変化を捉える	96
第10章 特別な支援を必要とする子どもの人間関係を支える	99
1. この章の目的	99
2. レイ君の事例を通して考える	100

(1) 4歳児クラスの冬	100
(2) 5歳児クラスの春	101
(3) 5歳児クラスの夏	102
(4) 5歳児クラスの秋	103
(5) 5歳児クラスの冬	104
3. この章の目的に立ちもどって	105
(1) 保育者がどのように受け止め、 クラスの一員として位置付けていくか	105
(2) 子どもたちが、 どのように関わりながら育っていくのか	105
(3) 保育者同士の連携	106

第11章 子どもの育ちを支える保護者と保育者の人間関係 107

1. はじめに	107
2. 気持ちを受け止め寄り添う	108
3. 支え、共に向き合う	109
4. 共感する	111
5. 保護者の言葉をきちんと受け止める	112
6. 共に成長	114

第12章 育ちを支える保育者同士の人間関係 115

1. 子どもの育ちを支える保育者同士の関係とは	115
2. 複数担任の一人として	116
3. 園内の保育者の一人として	118
4. 「わたし」「あなた」の保育課題を 「わたしたち」の保育課題に	120

第13章 子どもたちの人間関係を育む学級経営 123

1. 友達との関係を視野に入れた保育者と 一人一人の子どものつながり	123
2. 保育者と子ども、子どもと子どもをつなぐ 3つのアプローチ	125
(1) 遊びでのつながり	125
(2) 一斉活動でのつながり	127

(3) 生活でのつながり	128
3. 保育者と子ども、子どもと子どもの つながりを支える2つのこと	129
(1) 園内の保育者との連携	129
(2) 保護者との連携	129
第14章 子どもの育ちに関わる地域の人々との人間関係	131
1. 地域のなかでの子どもの人間関係の育ち	131
2. 保育実践にみる子どもと地域の人々との関わり	134
3. 園、保育者と地域の人々の人間関係と子どもの育ち	139
第15章 指導案作成から保育へ	142
1. 指導案の作成	142
2. 指導案の実践	143
(1) 指導案① 2歳児～遊び場面	143
(2) 指導案② 3歳児～遊び場面	146
(3) 指導案③ 4歳児～一斉活動	149
(4) 指導案④ 5歳児～生活場面	151
3. 指導案から保育へ	154
4. 保育後の評価の考え方	155
付 録	
学校教育法	158
幼稚園教育要領	158
保育所保育指針	162
就学前の子どもに関する教育、保育等の 総合的な提供の推進に関する法律	165

第1章

現代の乳幼児を取り巻く人間関係



予習課題

- ・あなたは幼い頃、どのような人たちに囲まれて育っただろうか。家族関係、きょうだい関係、近所の友達など、どのような人と関わっていたのか思い返して自分自身の人間関係マップを作成してみよう。

1. 親子・きょうだい、地域における子ども同士の関係の変化

(1) 家族における人間関係の変化

1) 家族形態の変化に伴う子どもの人間関係の変化

皆さんは、幼少期にどのような人たちに囲まれて生活していただろうか。核家族の人もいれば、祖父母と一緒に住んでいた人もいるだろう。一人っ子の人、きょうだいが多くいる人もいるだろう。例えば、家族の人数が異なればそこで生まれる人間関係も変わってくる。家族の人数が多ければ、そこで生まれる関係性も複雑になる。

まずは、家族のあり方が変化したことが、私たちの人との関わりにどのような影響をもたらしたかについて考えていこう。

核家族化という言葉が流布しはじめたのは、高度成長期の1960年代のことである。図1-1は、子どもがいる世帯における祖父母との同居の割合について示しており、データは既に核家族化が進んでいた1980年代と2017年の比較になるが、それでも祖父母と同居世帯が減少していること

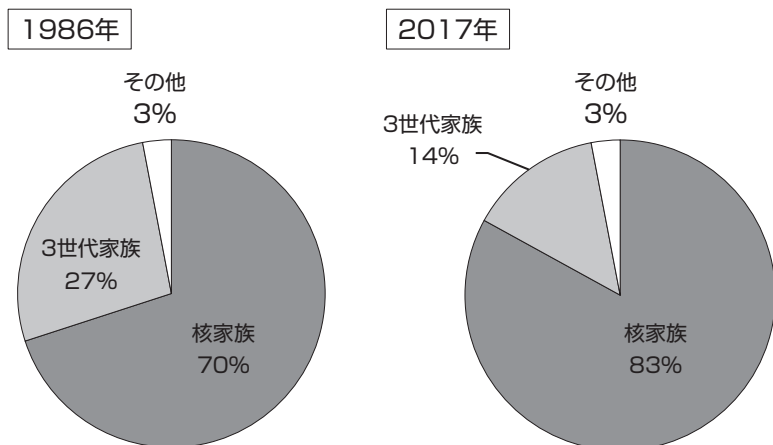


図1-1 子どもがいる世帯の核家族と3世代家族の割合の変化

(平成29年国民生活基礎調査、児童数別、世帯構造別児童のいる世帯数及び平均児童数の年次推移、厚生労働省)

がわかる。

1960年代以前は祖父母と一緒に住んでいる人たちも多く、3世代や4世代で生活をともにしていた。子育ての担い手が主に母親や父親だけのことが多い今とは異なり、祖父母なども子育てに関わる機会があった。子どもにとれば、3世代の同居は母親、父親、祖父母など関係する大人が多くいたことになる。お年寄りと日常的に関わる子どもは、そうではない子どもと比べて、祖父母世代との関わりに経験の違いが生まれることになる。

また現代において、子育ての不安や大変さを母親が一人で抱え込む状況がある。夫は仕事が忙しく、親族の協力も得られず、近所との付き合いもなく、母親が孤立して子育てを行う状況を“孤育て”と呼び、社会的な問題になっている。祖父母と同居していた時代は、今のように子育てを親(特に母親)が一人で抱え込むような状況にはならなかったかもしれない。

2) きょうだいにおける子どもの人間関係の変化

子どものきょうだい関係についても、人数によってそこで育まれる関係は異なる。一人っ子であれば、家で関わるのは両親のみである。しかし、3人きょうだいの末っ子であれば、両親以外にも兄、姉と関わる機会があ

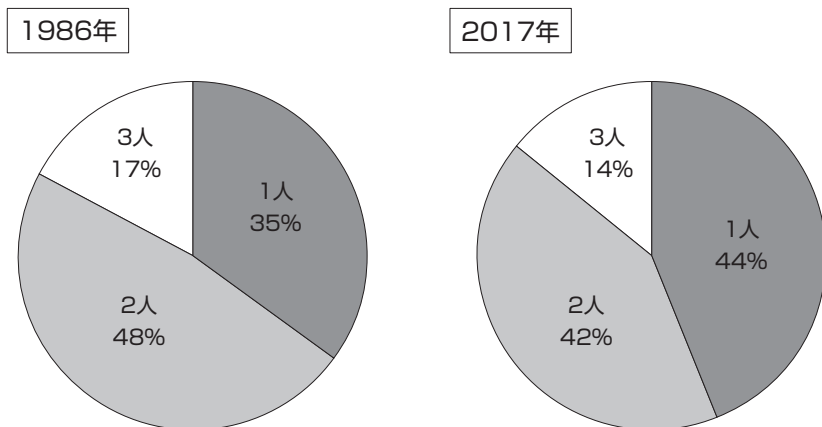


図 1-2 1世帯の子どもの数の比較

(平成29年国民生活基礎調査、児童数別、世帯構造別児童のいる世帯数及び平均児童数の年次推移、厚生労働省)

る。単に関わる人数が増えるということだけではなく、関係性が複雑になることを意味する。兄、姉と関わるだけでなく、兄と姉の関係を見ながら自分の振る舞いを考えるなど、家族間においても関係が複雑化する。しかし、1960年代には3人以上のきょうだいは珍しくなかったが、現代ではきょうだいが多くいる子どもは珍しくなった。図1-2は、1986年と2017年の1世帯の子どもの数の比較である。1986年には2人きょうだいが一番多かったものの、2007年には、一人っ子の割合が2人きょうだいの割合を超え、その状況は2017年まで続いている。

ここまで述べてきた核家族化の始まりや3人以上のきょうだいが多くいたのは、高度成長期以前で既に50年以上も経っており、現在子育てをしている世代も核家族の中で育っている。そう考えると、ここ数十年家族の形態が変わっていないのではないかと思うかもしれないが、同じ核家族といっても社会の変化に伴いその関わりの中身に変化が生じている。

3) 親子関係の変化

1990年代後半から「友達親子」という言葉を耳にするようになる。友達のように悩み事を相談できる親子が増えているといわれるようになって

た。良好な親子関係自体は良いことであるとする一方で、このような親子関係を危惧する見解もある。木村は、親子関係が縦の関係から横のフラットな関係に変化したことで、子どもの承認願望が満たされにくくなっていることを次のように指摘している。「承認の重さは、自分と対等なものではなく、自分より大きな存在、権威ある存在の承認の方が絶対的なものであり、安心感も得やすい。しかし、親子関係も友達関係のようになると、承認の安全性は危うくなってしまう」¹⁾。つまり、今までの縦の関係であった親子関係ではなく、友達のように接する大人が増えることで、子どもが親から認められることに大きな価値を見出せなくなってしまうというのである。このような変化がこれからの人間関係の構築に大きな影響を与える可能性もある。

(2) 地域における子ども同士の関わり

1) 地域社会の崩壊

皆さんは子ども時代に、近所の友達とどのような場で遊んでいただろうか。30年ほど前には、子どもたちだけで夕方暗くなるまで近所の公園で遊ぶ姿もあった。子どもたちだけで外で思いっきり遊べる環境があったのだ。今はどうだろうか。もちろん、友達と外で遊ぶ子どももいるだろう。しかし、子どもに関わる犯罪も多く、親は安心して外へ遊びに行かせることができない状況がある。

その背景には、何があるのか。子どもに関わる犯罪への不安は言うまでもないが、昔も子どもに関わる犯罪がなかったわけではない。それ以外にもう1つ、地域社会の崩壊が影響を与えていると考えられる。地域のつながりがあった時代には、子どもたちは地域社会によって見守られて育っていた。例えば、外で遊んでいる時にも近所のおじさんやおばさんが見守ってくれていた。危険なことをしている時には叱る光景もあった。しかし、今では他人の子どもを叱るという光景は見かけなくなった。地域社会の崩壊が子どもの遊び場へも影響を及ぼしているのである。

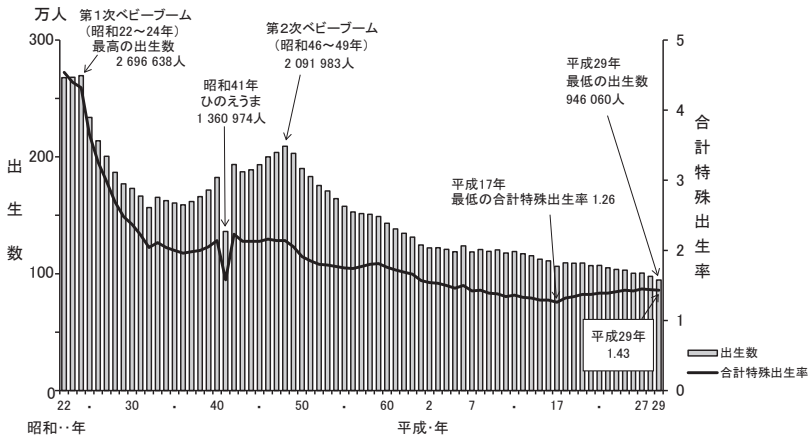


図1-3 出生数及び合計特殊出生率の年次推移

(人口動態統計、厚生労働省)

2) 子どもの数の減少：少子化

少子化が社会的な問題になっていることは、皆さんも既に知っていることだろう(図1-3参照)。また、知っているだけではなく、特に都市部から離れた地域に住んでいる方は、同級生の数が少ないなど、実際に子どもの少なさを肌で感じた人も多くいることと思う。

小学校が次々と統廃合され、通っていた小学校がなくなってしまうケースがある。統廃合の末に小学校が町内で1つだけになるということがどういうことか、想像してみてほしい。学校が終わった放課後、皆さんが子どもだった時代はどのような遊びをしていただろうか。ランドセルを置いて、近所の友達と遊びに出かけたかもしれない。しかし、町内で1つしか小学校がないということは、家から小学校が離れており、バスなどで通学する子どももいることになる。つまり、近所に友達がいるとは限らず歩いていける範囲に友達がいなくてもある。

一方、そうではない地域に目を向けてみるとどうであろうか。友達は今近くにいてもいいし、近くに遊べるような公園もあるかもしれない。しかし、先ほどの地域社会の崩壊でも取り上げたように、子どもが関係する犯罪がニュースになっている状況を見ると、なかなか子どもたちだけ